

農山漁村地域における廃校を活用した複合型高齢者福祉施設の使われ方

- 山口県阿武町「ひだまりの里」を対象として -

UTILIZATION OF ELDERLY WELFAIR FACILITY CONVERTED
FROM CLOSED PRIMARY SCHOOL IN RURAL AREA

- Case Study on 'HIDAMARI-NO-SATO' in Abu Town Yamaguchi Prefecture -

三島幸子*, 中園真人**, 山本幸子***, 孔相権****

Sachiko MISHIMA, Mahito NAKAZONO, Sachiko YAMAMOTO and Syohken KOH

This paper aims to clarify the regional demands of elderly welfare facility converted from closed primary school by grasping the management form and use characteristics. The utilization rate is stable at 80% in day service part, and the group home was reached to the capacity at the opening time, so the development effect is significant. About the evaluation of space utilization, day service part has living and training room so the daily life of users is carried out smoothly, and the group home converted the fan shaped classrooms so the wide vision for users and staffs is secured.

Keywords: Rural Area, Day Service Facility, Management, Utilization

農山漁村地域, デイサービス施設, 運営, 使われ方

1. 序論

過疎地域の自治体においては、人口減少と高齢化の同時進行により、高齢者の暮らしを支援する医療福祉需要増大への対応とサービス水準の維持向上という課題を抱えている。一方児童生徒数の減少に伴い小中学校の統廃合による廃校施設が増加しており、2002-2011年の10年間に全国で3,877校が廃校となっている¹⁾。この内活用されているのは7割程度で、3割は活用計画もなく建物も残されているのが現状であるが^{注1)}、近年文部科学省による地方公共団体と連携した「みんなの廃校」プロジェクトにより、廃校を活用し地域の活性化に取り組む事例が増加している^{注2)}。公民館・資料館・社会体育施設等の地域交流施設が最も多いが、福祉・医療施設としての活用例も見られ、特に少子高齢化が進む過疎地域における高齢者福祉施設としての廃校活用は、福祉需要増大への対応と地域活性化を目指す上で有効な活用方法として位置付けられる。

関連既往研究には、廃校の発生要因と課題に関する研究²⁾、廃校の転用プロセスに関する研究³⁾、統廃合と廃校舎の利活用決定プロセスの関連を考察した研究⁴⁾、廃校のある地域属性の特徴と再利用に関する研究⁵⁾等がある。また、廃校を体験交流施設⁶⁾や都市農村交流施設⁷⁾、地域活動施設や児童福祉施設等を組み合わせた複合施設へ活用した施設の事例分析を行った研究⁸⁾等地域再生に関連した報告が多く見られる。一方、廃校の高齢者福祉施設利用に関しては、住民主体の改修事例研究⁹⁾、高齢者施設等に転用する際に建築基準法が与える影響^{10,11)}、転用施設の温熱環境等に関する調査報告¹²⁾はあるが、過疎農山漁村地域における廃校活用型の地域高齢者福

祉施設の利用特性・運営形態¹³⁾や、平面構成と使われ方の関係に視点を置き施設の空間機能評価を行った研究蓄積は少ない。過疎地域においては今後廃校を活用した高齢者福祉施設の増加が予想されるが、施設利用特性及び空間機能評価に基づく福祉施設としての改修設計方法と空間構成のあり方の検討が課題として位置付けられ、研究蓄積の少ない現状では個々の改修事例を対象とした地域施設計画及び建築計画的観点からの有効性の検証が重要と考える。

山口県阿武町では広域基幹施設として養護老人ホーム・デイサービスセンター・在宅介護支援センター・特別養護老人ホーム及びグループホームが整備された。さらに同一運営主体により民家活用型の通所介護施設3箇所と、廃校を活用した複合型高齢者福祉施設「ひだまりの里」が開設(2010)され、過疎地域における福祉サービスネットワーク構築の先進事例¹⁴⁾として注目される(図1)。そこで本論では「ひだまりの里」を対象に施設の利用特性と運営形態を把握し、地域の高齢者福祉需要への対応関係を明らかにするとともに、廃校活用施設の空間構成と使われ方の関係を整理した上で空間機能評価を行うことを目的とし、得られた知見をもとに廃校の複合型高齢者福祉施設としての活用可能性と課題に関し考察を加える。

調査は施設の建築資料収集と実測、施設利用者登録データ収集と使われ方調査(デイサービス部門(2011.9.18-23)、グループホーム(2011.10.24-30, 12.19)、介護予防(2011.10.18, 12.6))及び介護予防運営に関する聞き取り調査(2012.1.24)を実施した。

2. 阿武町の概要と人口、児童・学校数の推移

* 山口大学大学院理工学研究科 博士後期課程
** 山口大学大学院理工学研究科 教授・工博
*** 筑波大学システム情報系 助教・博士(工学)
**** 山口大学大学院理工学研究科 講師・博士(工学)

Doctoral Course, Grad. Sch. of Science and Eng., Yamaguchi Univ.
Prof., Grad. Sch. of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng.
Assistant Prof., Fac. of Eng., Info. and Systems, Univ. of Tsukuba, Dr. Eng.
Lect., Grad. Sch. of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

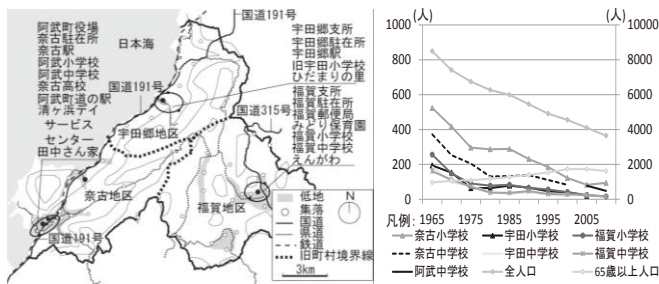


図1 阿武町の主要施設

図2 児童生徒数の推移

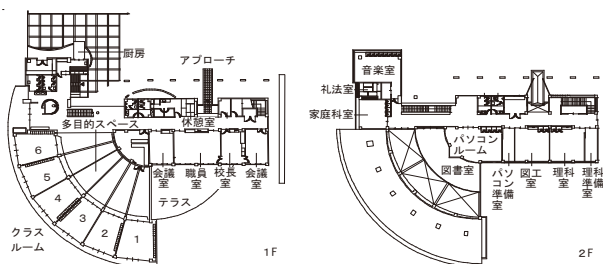


図3 改修前平面図

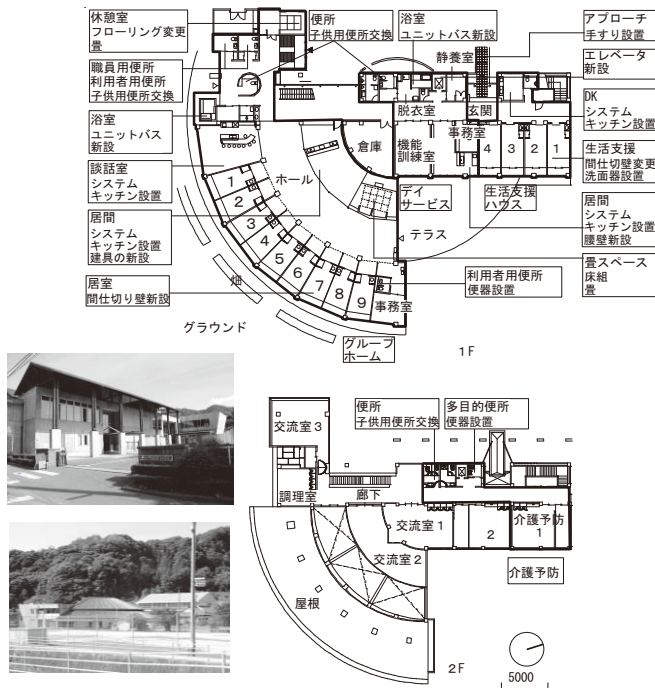


図4 改修後の施設の空間構成

2.1 阿武町の概要

奈古町・宇田郷村・福賀村が1955年に合併し阿武町となる(図1)。日本海に面した農林漁業を主産業とする地域(面積116.1km²)で、合併当時の人口は奈古地区が約5千人、宇田郷・福賀地区が約2.3、2.6千人であった。現在は国道191号沿線の平地部に奈古地区の中心市街地が広がり、JR奈古駅・町役場を中心に、保育所・小中高等学校を始め文化ホール・武道館等の公共施設や郵便局・農協・民間医療施設・購買施設が集積立地し、町の中心地区として機能している。宇田郷地区は日本海と国道191号に挟まれた漁村集落を中心とし、気温は比較的温暖で周辺の丘陵地帯に農村集落が広がる。福賀地区は山岳・丘陵地域が大半を占め、盆地に福田上・下と宇生賀の中心集落が立地する。そのため、冬季には積雪が多い地域である。

2.2 人口と児童・学校数の推移

阿武町では高度経済成長期の1960年代以降人口減少に転じ、8.5千人(1965)から3.7千人(2010)へと45年間に4.8千人減少した。総人口が減少する中で、社会移動の少ない65才以上人口は0.97千人(1965)から1.6千人(2010)へ増加し、高齢化率は11.4%(1965)から44.4%(2010)に上昇した。2005年以降65才以上人口は微減に転じたものの、75歳以上人口は2025年まで増加が予測されており、今後も高齢者福祉サービス需要の増加が見込まれる。一方、小学校児童数は1960(1617人)ー1975年(450人)にかけて大幅に減少し、その後も減少傾向が継続しており、2010年の全児童数は110人である(図2)。中学校生徒数も1962年の907人をピークに減少に転じ、2010年には63人に減少した。この結果、1964ー1970年の間に3小学校の5分校全てが廃校となり、2004年には宇田・奈古中学校が阿武中学校(奈古地区)として統廃合された。さらに2009年には児童数8人の宇田小学校(2000年建替)が廃校となり、生徒数16名(2010)の福賀中学校でも統廃合が検討されている。

3. 「ひだまりの里」の整備プロセス

3.1 廃校活用の経緯

宇田小学校の廃校決定後、地域住民と行政による廃校後の利用方法に関する協議が行われた。地元の再活用の要望が強く種々の方法が検討されたが、最も要望の多い高齢者福祉施設として活用すること、また広域基幹施設を運営する社会福祉法人に運営を委託することが2009年10月に決定された。デイサービス施設は2008年に宇田地区中心集落に2階建て木造民家を改修した「ひだまり」が開業されていたが、デイサービスに利用される1階部分の面積が手狭であったため、これを契機に移設することとなった。また広域基幹施設では多数の特別養護老人ホーム入居待機者を抱えており、同敷地内にグループホームが設置(2005)されたが、需要増のため新たにグループホームを新設する事となった。さらに退院後の一時入居や冬期の積雪量の多い地区居住者の一時避難施設として、生活支援ハウスも併せて設置されることとなった。

3.2 施設の改修内容

改修前後の平面図を図3、4に示す。1階の教室を2分割してグループホーム居室とし、その他に談話室とグループホーム事務室が設けられた。教室前の多目的スペースはホールと居間(台所)・和室に改修され、廊下に浴室・脱衣室が増築された。各学年1クラス構成の扇形の教室と多目的スペース部分に居室・ホール・居間・和室が順に配置され、居間とホールはガラスの格子引き戸で間仕切られ、視覚的連続性が確保されている。旧管理部門の壁の位置は変更されたが管理設備は既存のまま、デイサービス部門2室の一部に施設全体を管理する防災・電気制御設備のある事務室が設けられている。この他に4室を生活支援ハウスとし台所が新設された。トイレは全て子供用便器から一般用へ改修され、シャワー・更衣室部分を脱衣・浴室に変更し、廊下には手すりが新設された。

既報¹⁵⁾では、デイサービス専用計画設計された施設の場合、全プログラムを同一空間で行う「1室完結型」が多いことを指摘したが^{注3)}、「ひだまりの里」は数少ない午睡室を設けた「午睡室分離型」施

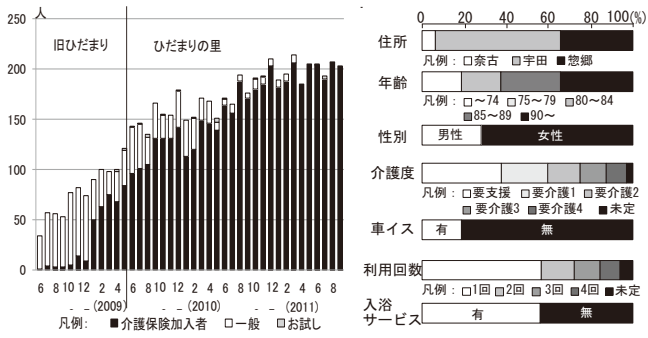


図5 利用登録者数

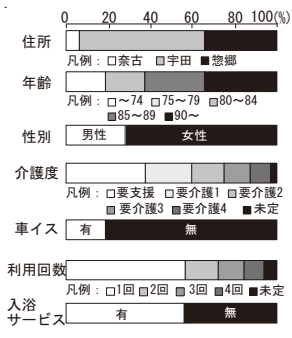


図6 利用登録者属性

設として位置付けられる。また2階の利用を前提に玄関横にエレベーターを新設し、1階同様便器交換・多目的トイレ新設・手すりの設置がなされたが、平面構成に大きな変化は見られない。改修は学校施工業者により行われ、グループホーム・生活支援ハウスのスプリンクラー設置工事に改修費1億4000万円の約半額を要している^{注4)}。2010年4月にグループホーム、同6月にデイサービス、同11月に生活支援ハウスが開設され、2011年4月より社協による介護予防教室が開催されている。

4. 各部門の運営・利用形態

4.1 デイサービス部門の利用形態

(1) 利用者数の推移と基本属性

2008年の「ひだまり」開設以降の利用者数推移を図5に示す。開設当初は募集時期でもあり、介護保険非加入者が大半を占めていたが、2009年1月頃から保険加入者が増え、「ひだまりの里」移設後の2010年12月には保険加入者数が月間延200名を超えた。その後も保険加入者が増え続けたため、2011年4月に非加入者の受け入れを止めたが、現在も延利用者数は月間200名前後と安定している。

利用者の基本属性と利用形態を図6に示す。年齢は85歳以上が6割と多く女性が7割を占める。介護度は要支援が4割と多いものの要介護4の利用者も3名おり、2割弱の利用者が車イスを利用している。また広域基幹施設のデイサービスセンターから施設変更した利用者が6名あり、住居近くの施設利用による乗車時間短縮や、地区内利用者が多く知合いがいること等が理由として挙げられた。要支援の利用者が多いため利用回数は週1回が5割を占めるが、入浴サービスは介護度の高い利用者を中心に半数以上が利用している。

(2) 利用圏と送迎

「ひだまりの里」移行前の2009年と移行後の2011年の利用圏を図7に示す。旧「ひだまり」では大半が宇田地区の利用者で50・80%利用圏は0.2・1.5kmと狭い。一方現施設では利用人数が増加し、特に惣郷地区の利用者が増加しており各利用圏は共に1.0・1.6kmに拡大している。送迎は職員2名がワゴン車と軽自動車複数に分け行う。宇田地区利用者は1往復に要す送迎時間は短い、車が入れない急斜面や小道沿いに居住する利用者もあり、徒歩による送迎のため時間を要する場合もある。また旧施設同様奈古地区からの利用者の送迎には時間を要しているが、週1回利用のため週合計送迎時間は11.4時間から9.3時間に短縮されている。

4.2 グループホームの利用形態

入居者は女性が8名と多く年齢は70-90歳代である(表1)。介護度は要介護1-3の範囲であるが、介護度3の入居者が4名含まれ

表1 グループホーム入居者属性

性別	年齢	移動方法	介護度	認知度	簡易便所
F91	シルバーカー	要介護3	Ⅲb	有	有
F78	車イス、手引歩行	要介護3	Ⅱb	有	有
F86	車イス、手引歩行	要介護2	Ⅱa	有	有
F70	自立歩行	要介護1	Ⅱa	無	無
M82	自立歩行	要介護3	Ⅲa	無	無
F86	自立歩行	要介護1	I	無	無
F90	自立歩行、杖	要介護2	Ⅱb	有	有
F86	自立歩行	要介護1	Ⅱa	無	無
F90	シルバーカー	要介護3	Ⅱb	無	無
M87	自立歩行	要介護1	Ⅲa	無	無

注) 簡易便所:居室内に置くポータブルトイレ

表2 生活支援ハウス利用者属性

性別	居住地	利用理由	利用開始時期	利用期間	移動方法	家族構成
M87	惣郷	妻の入院	H23.6.10	30日(各)	自立歩行	夫婦
F78	奈古	夫の死亡	H23.3	30日	車椅子	単身
M76	宇生賀	冬期の一時入居	H22.11	30日	杖	単身
F89	福田	退院後一時入居 冬期一時入居	H22.11	120日	自立歩行 杖	単身
F82	福田	退院後一時入居 冬期一時入居	H22.11	120日	自立歩行 杖	単身
F84	宇田	退院後一時入居 冬期一時入居	H22.11	120日	車椅子 手引歩行	単身

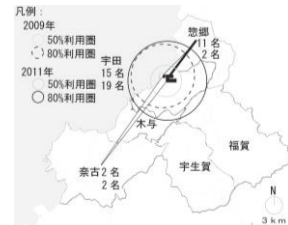


図7 デイサービス利用圏



図8 グループホーム・生活支援ハウス利用圏

表3 介護予防事業の運営形態

	奈古1	奈古2	宇田	福賀
開催する曜日	第1,3木曜日	第2,4木曜日	第1,3火曜日	第2,4火曜日
時間	9:00~12:00	9:00~12:00	9:00~12:00	9:00~12:00
開催地点	母子健康センター	母子健康センター	ひだまりの里	福賀支所
建物の形式	木造	木造	RC造	RC造
参加人数(定員)	8名(10名)	5名(10名)	8名(10名)	19名(10名)
利用者内訳	奈古8	奈古5	宇田7, 惣郷1	福賀14, 宇生賀5
ボランティア人数	2名	2名	2名	2名
活動内容	体操・個人面談・レクリエーション・体力チェック(年3回)・口腔ケア・フットケア			
行事(各地区)	花見(4月)・七夕(7月)・素麺流し(8月)・運動会(10月)・紅葉見学(11月)			
行事(全体)	クリスマス会・忘年会(12月)			

*1個人面談:血圧測定、体の調子を聞く等/*2体力チェック:握力、5m徒歩、片足立ち等
*3行事(全体)は奈古の町民センターで行っている

る。シルバーカー利用を含め自立移動可能者は7名で、2名は手引き歩行・車椅子で移動する。認知度はⅡa-Ⅲbが8名で、認知度Ⅱa, bが6名と過半を占める。入居者の従前居住地を図8に示す。全員阿武町内居住者で、施設に近い宇田・惣郷地区が各2名であるが、町中心部の奈古地区が3名、山間部で遠距離の福賀地区2名と、町内全域からの需要に対応している。

4.3 生活支援ハウスの利用状況

生活支援ハウスの管理運営はグループホーム職員が兼任している。食事・入浴を始め利用者の自立生活が入居条件であるが、実際には車椅子利用者の受入れもあり、介助が必要な場合には職員が日常生活の世話をを行う。利用者の基本属性を表2に示すが、開設後6名の利用があり、単身高齢者が多く、利用理由は冬期又は退院後の一時入所が多い。利用期間は1ヶ月が基本であるが中には4ヶ月の例もある。利用者の居住地は、宇田・惣郷・奈古・宇生賀が各1名、冬季積雪量の多い福賀地区が2名で町全域から利用されている(図8)。調査時の職員の聞き取り調査より、生活支援ハウスの利用は基本的に介護度の低い自立高齢者に限られているため、ショートステイ施設としての利用も地域住民により望まれているとの意見が聞かれた^{注5)}。

4.4 介護予防事業の運営形態

介護予防の運営形態を表3に示す。2008年当初は町が阿武福祉会に委託し宇田地区で行われていたが、2011年より阿武町社会福祉協議会が主体となり、奈古・宇田・福賀の3拠点に拡大され、宇田地区の介護予防教室の内容は全身体操・個人面談・レクリエーションが中心で、職員3名・ボランティア2名が担当する。朝9:00頃全員揃うとお茶が出され、職員の話しかけをきっかけに会話が行われる。その後体操が行われ、体操が終わるとお茶を飲み、全員でゲームを行う

表4 地域婦人会の活動内容

回	日付	時間	場所	参加人数	内容
第1回	H23.6.28	13:00~	談話室	約20名	認知テスト&Qシート/認知症とは/4大認知症とは/認知症の原因について
第2回	H23.7.28	13:30~	談話室	約20名	認知症の疑似体験/認知症のケアのポイント
第3回	H23.8.25	13:30~	談話室	約20名	第1,2回の振り返り/アルツハイマーについて
第4回	H23.9.30	13:30~	談話室	約20名	第1~3回の振り返り/演習(もし認知症になったら)
第5回	H23.10.28	13:30~	居間	約30名	グループホームの入居者との交流/ビンゴゲーム/お手玉回し/口の体操/おやつを食べながらお話
第6回	H23.12.19	13:30~	ホール	44名	クリスマス会/コーラスの先生の指導で合唱・演奏/婦人会手作りのケーキを食べる

注6)。この間職員1名が利用者と体調や家庭生活について個人面談・助言を行う。ゲームが終わるとお茶が出され11:30に終了するが、利用者からは昼食の要望も出されている注7)。他の3ヶ所でも上記の内容で取り組まれる。また季節行事として、表3に示すイベントも開催されている。利用者は80代で単身者が多い。

4.5 地域交流活動

グループホームは認知症対応のため、開設当初は近隣住民に不安感があった。そこで住民の理解を得るため、地元婦人会の認知症勉強会が年5回開催され(表4)、第1-4回は談話室で認知症や認知症高齢者への対応方法について学び、第5回は居間で入居者との交流会が開催された。談話室は痴呆症の勉強会の場としても利用されており、グループホーム入口部分に位置し、居間や居室等直接入居者の日常生活の場と交錯することなく活動が遂行できている。第6回のクリスマス会は今後の交流の試みとして、婦人会や入居者に加えデイサービス利用者や地域住民も参加し開催されたが、多人数の催事の場としてホールが有効に活用されていた。

4.6 利用特性のまとめ

デイサービスの月間延利用者数は200名前後で、施設の平均稼働率は約80%と安定しており、近隣地域の需要増加に対応できている事を示す。また、以前より利用圏は広くなり、介護度も要介護3以上の利用者が増加し、車椅子利用者の受け入れも可能となっている。グループホームは施設開設と同時に定員に達し、現在待ち人数は50名で、阿武町内の80歳代の女性が多い。入居者は全員阿武町内居住者で町内の一部需要を満たしている。また施設利用者や地域住民が参加した婦人会主催のクリスマス会が行われ、地域交流の拠点としても利用されている。

5. デイサービス部門の使われ方

5.1 1日の生活プログラム

調査期間中の1日の生活プログラム例を図9に示す注8)。プログラムは、1)送迎(迎え)2)バイタルチェック・お茶 3)自由時間及び入浴4)昼食6)午睡7)機能訓練8)おやつ9)送迎(送り)から構成される。利用者は基本的に居間で自由時間を過ごすが、プログラムに応じ居間と機能訓練室を使い分ける。機能訓練室は午睡、機能訓練に使用され、自由時間には休養の場としても利用される。

5.2 利用者の1日の生活行為と場

(1)送迎・バイタルチェック

送迎・バイタルチェックの事例を図10に示す。送迎は基本的に2名の職員が担当地区を決め、ワゴン車と軽自動車の2台で数回に分けて行う。駐車場は玄関から遠いため、職員は玄関前に車を止め利用者を施設内へ誘導する。アプローチには手すりが設置されており、介護度の低い利用者は1人で玄関に向かう場合が多い。玄関には椅子

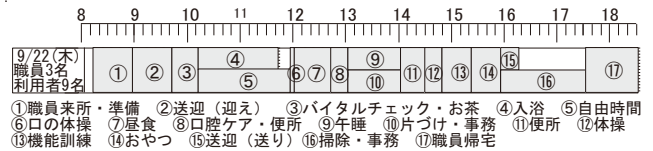


図9 デイサービス部門の1日の生活プログラム

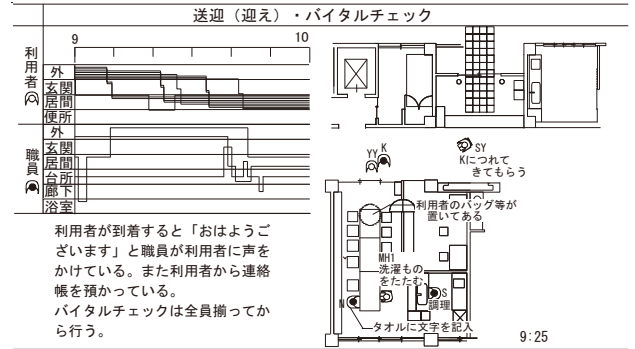


図10 送迎・バイタルチェックの場面

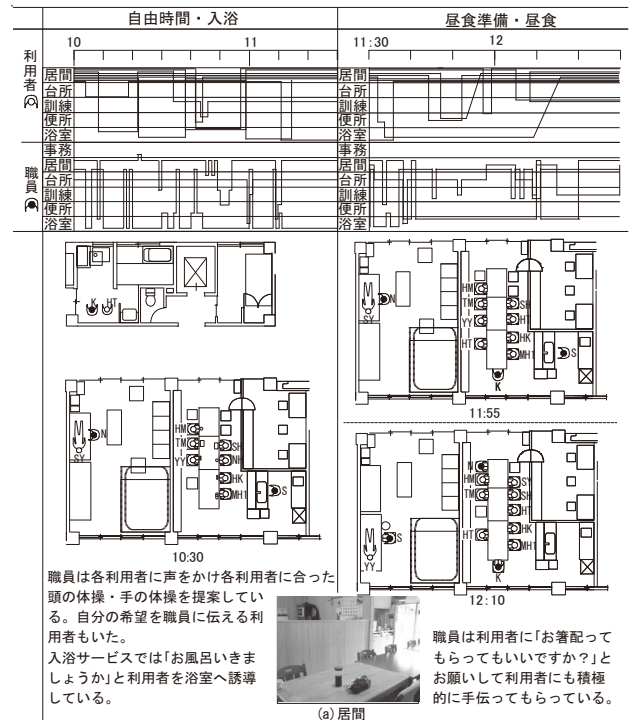


図11 入浴・自由時間・昼食の場面

子が配置され、座して靴の履き替えを行う。

(2)午前中に入浴・自由時間

入浴・自由時間の事例を図11左に示す。3名の職員が入浴介助、調理補助、利用者の見守り担当に分かれ、他に調理ボランティアが1名来所する。居間では利用者は個人で行う活動が行われる(写真a)。調理補助職員は見守り担当職員がトイレ介助を行う間見守りを行うが、ボランティアが休みの日は調理を担当するため手を離せず、トイレ介助時は利用者の見守りが出来ない。また、機能訓練室は体調不良の利用者の休養室として使用されるが、居間から機能訓練室の様子が見えないため、見守りの際居間と行き来する必要がある。

入浴サービスは職員が声をかけて浴室へ誘導し、必要な利用者

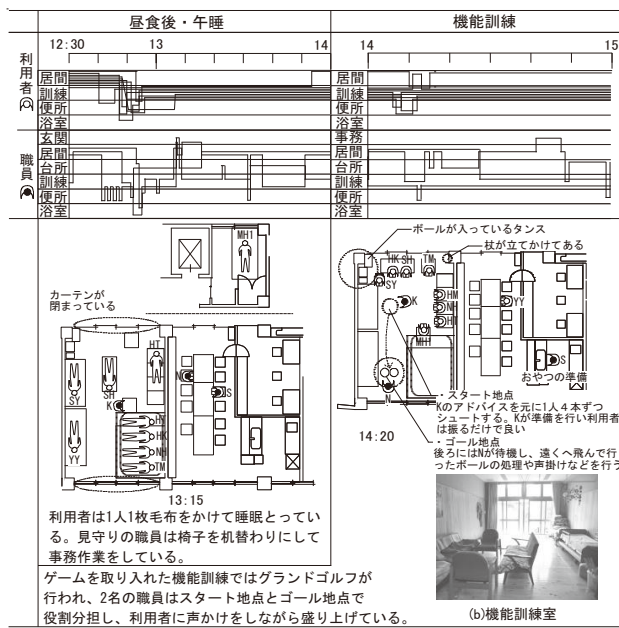


図 12 午睡、機能訓練の場面

表 5 1 週間の機能訓練の内容

9/18	9/19	9/20	9/21	9/22	9/23
棒ゲーム	お手玉 芋取ゲーム	棒ゲーム 芋取ゲーム 風船バレー	ボール遊び お手玉 しりとり	グランドゴルフ ボール蹴り	じゃんけん 玉入れ あんたがたどこさ



(c)9/18 棒ゲーム (d)9/20 風船バレー (e)9/23 玉入れ

写真 1 機能訓練の場面

は介助を行う。介助の必要のない利用者に対しても見守りを行うため、入浴時は脱衣室に待機する。入浴を終えると居間まで利用者に付添い、次の利用者に声をかけ浴室に誘導する。入浴人数は日より異なるが、全日程とも午前中のみで終えている。

(3) 昼食準備・昼食

昼食の事例を図 11 右に示す。事務室があるため居間の横幅が狭く、利用者の逃げの場がなく座席後部の通行や利用者の間から配膳する際、利用者に接触する恐れがあり支障をきたしている。また盛付けは 2 名で行うが、台所が狭いため 2 名入ると通路が塞がれ台所から居間への移動が難しい。料理が揃うと利用者は各々食事を始め、職員もテーブルの端に座り利用者の様子を見ながら食事をとる。

(4) 午睡・機能訓練・おやつ・送迎

午睡の事例を図 12 左に示す。昼食を終えた利用者から順にトイレの洗面所で口腔ケアを行い、機能訓練室で午睡を行う。介護度の高い利用者はベッド、低い利用者はソファや絨毯の上へ誘導される。職員 1 名が見守りのため部屋に残り、他の職員は居間で事務作業を行う。基本的には全員午睡をとるが、午睡しない利用者がある場合は居間で見守る。

14:00 に職員は利用者を起こしてトイレへ誘導し、全員揃うと 2 名の職員が中心となり機能訓練が始まる。機能訓練の事例を図 12 右に示す。ソファ等に座って円陣で行い、その後ゲームを取り入れた機能訓練を行う(写真 b)。この日はソファを移動して広い空間を

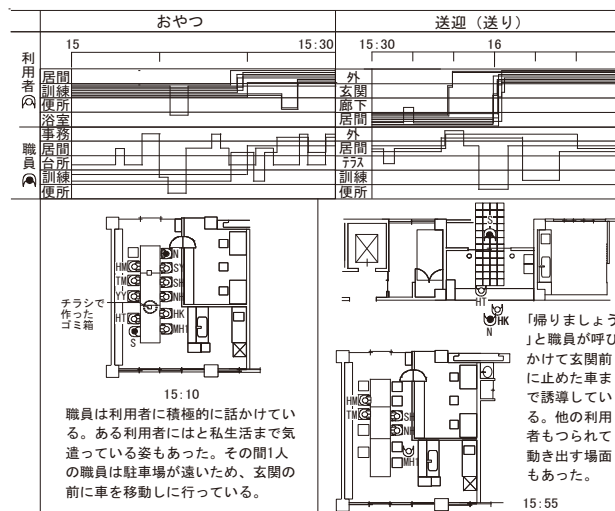


図 13 おやつ、送迎(送り)の場面

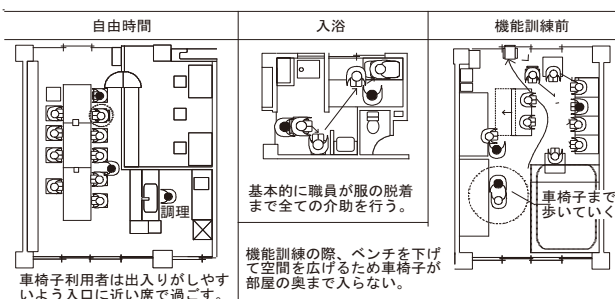


図 14 車椅子利用者の午前と入浴、機能訓練前の場面

確保しグランドゴルフが行われた。この間に居間では 1 名の職員が事務作業やおやつの準備を行う。また、ゲームを取り入れた 1 週間の機能訓練の内容を表 5 に示す。利用回数の多い利用者もいるため、毎日ゲームの種類を変えている。機能訓練中の席移動は少ないが、内容に応じ 2 チームに分かれ向かい合わせで行う日も見られた。

次におやつ・送迎の事例を図 13 に示す。レクリエーション後、居間に戻りおやつを食べながら話し送迎までの時間を過ごす。送迎の時間が近くなると 1 名の職員が送迎車を玄関前に付ける。その後、職員は利用者に声をかけて順番に送迎車に誘導する。他の利用者は会話などをしながら順番を待つ。

5.3 車椅子利用者への対応

介護度の高い車椅子利用者が来所する日もある(図 14)。居間は車椅子で部屋の奥に入ることが出来ないため入口側の席で過ごす。入浴時は車椅子のまま浴室入口まで移動出来ないため、脱衣室の椅子に座り替え脱衣後浴室まで手引き歩行で誘導する^{注9)}。体や髪を洗う際は利用者が自力で行えない行為のみ職員が介助する。その後浴槽端部に座らせ足から入浴させる。入浴後は脱衣室の椅子に座り着衣し、髪を乾かした後車椅子に座り替える。昼食時は椅子に座り替え食事をとる。昼食後は先に歯磨きに連れていき機能訓練室のベッドに誘導する。ベッドで午睡を取る利用者の起床が遅くなると、機能訓練の際ソファを後ろに移動させるため、車椅子が入らず手引き歩行で車椅子まで連れていく場面が見られた。また、静養室で午睡を取り、機能訓練にも参加しない利用者もいた。トイレは女性用と車椅子用が兼用で、女性利用者が多いため混雑することが多く、その際職員はグループホームのトイレまで連れて行く。

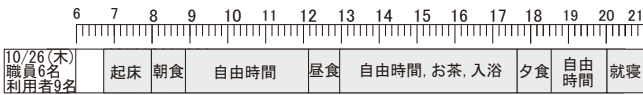


図 15 グループホームの1日の生活プログラム

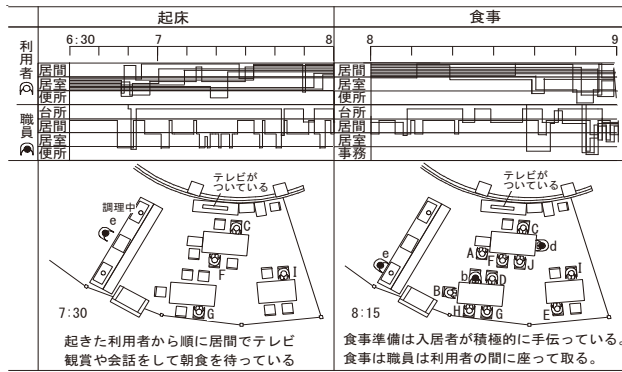


図 16 起床、食事の場面

6. グループホームの使い方

6.1 1日の生活プログラム

調査期間中の1日の生活プログラム例を図15に示す。1日の生活は、1)起床・洗面2)朝食(8:00)3)自由時間・お茶4)昼食(12:00)5)自由時間・お茶おやつ6)入浴7)夕食(18:00)8)自由時間9)就寝から構成される。起床・就寝時間は自由だが、食事は全員居間に集う。自由時間の過ごし方は居間での談話・テレビ視聴をはじめ、旧花壇を利用した菜園での野菜・花作り作業、個室での読書等自由に過ごす。

6.2 入居者の1日の生活時間と行為の場

(1)起床・洗面・朝食

起床・食事の事例を図16に示す。起床が早い入居者は6:30頃から居室外での行動を開始するが、職員呼びかけで居間へ来る入居者もいる。朝食までの間は居間で過ごす入居者が多い。食事は職員の手作りで、席は決められており、朝食が配られた入居者から順に朝食を取り始める。その間、早番の職員は台所で調理器具の片付けを行い、夜勤担当職員は利用者の間に座り入居者の様子を見ながら食事をとる。

(2)午前の自由時間・昼食

午前の自由時間の事例を図17左に示す。自由時間の過ごし方は入居者により異なり、朝食を終えるとトイレへ行き居室へ戻る入居者や居間でテレビや会話を楽しむ入居者、ホールや屋外など好みの場所で過ごす入居者がいる。10:00にはお茶が出されるため、居室にいる入居者も職員の呼びかけで居間に集まり、居間に来た入居者から順にお茶が出される。お茶の後には職員が数名の入居者を連れて買い物や散歩に出かける等施設外での行為も頻繁に見られた。

昼食前は居間に全員揃っていない場合も多く、職員が入居者へ声かけを行う。昼食準備の際にもオープンキッチンのため入居者の様子を見守ることができる。昼食時は朝食・夕食に比べ職員数が多いため、各机に分かれて介助や声かけが可能で会話も多い。

(3)午後の自由時間・お茶・入浴

午後の自由時間の事例を図17右に示す。居場所は居間・居室・ホールが主である(写真f)。午前中同様外出や屋外での行動もあり、この日は畑で芋掘りが行われた。また、ホールのテーブルでの談話が多い時間帯であり、その場合職員がお茶とおやつを運ぶ。

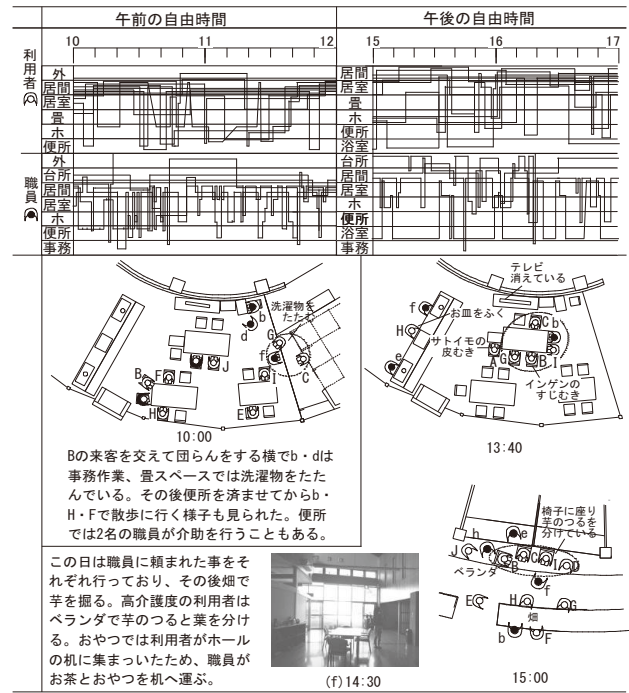


図 17 自由時間(午前・午後)の場面

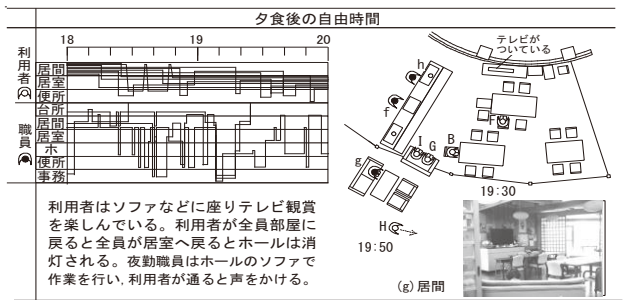


図 18 夕食後の場面

入浴は隔日が基本で、14:30頃から職員の誘導・介助を受け順番に入る。入浴介助は1名の職員が行い、入居者1人に20-40分の時間を要し、多い日は1日に5名が入浴する。洗面・入浴用具は個人毎に居室に置かれており、入浴前後に入居者又は職員が居室へ立ち寄り準備・保管する。介護度の低い入居者には入浴時に終始付添うことはせず時折様子を見に行く。

(4)夕食・夕食後の自由時間・就寝

夕食の事例を図18に示す。夕食は座席や食事の形態は朝食・昼食と同様である(写真g)。夜勤職員以外は食事をとらず、入居者の食事中も他の作業を行う。就寝前はテレビ観賞・読書・会話など静的な行為が多い。食事後1時間ほど経つと居間にいる入居者は徐々に少なくなり排泄を済ませ居室へ戻る。夜間に排泄以外で居室を出る入居者は見られず、居室に簡易便器がある入居者は居室から出ることではない。夜勤職員は入居者の動きを把握しやすい居間やホールのソファで作業を行い、一定時間毎に入居者の様子をうかがう。

6.3 生活時間と移動行為から見た入居者の生活パターン

以上、1日の生活プログラムの流れに沿って施設の使い方の特徴を定性的に整理したが、食事以外は自由時間であり入居者の行動パターンに違いが見られたことから、利用者の生活パターンと空間構

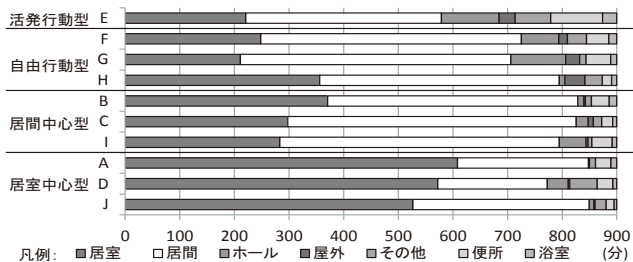


図 19 1日の滞在場所と時間

表 6 グループホーム職員の属性と勤務形態

職員	年齢性別	介護上の資格	勤務形態	経験年数	現施設の勤務年数	勤務形態(日)(2011年10月分)			
						早番	日勤	遅番	夜勤
a	F42	介護支援専門員、介護福祉士	施設長	22年7ヶ月	1年7ヶ月	4	7	1	5
e	F64	介護支援専門員、介護福祉士	正社員	34年7ヶ月	7ヶ月	5	2	4	5
b	F61	介護福祉士	正社員	21年	1年7ヶ月	3	3	5	5
h	F47	看護師	正社員	15年	7ヶ月		21		
f	F22	介護福祉士	正社員	2年7ヶ月	7ヶ月	3	2	6	5
c	F36	ヘルパー2級	正社員	3年	1年6ヶ月	4	2	4	5
d	M25		正社員	1年7ヶ月	1年7ヶ月	6	8	6	
g	M24		正社員	2年7ヶ月	7ヶ月	4	1	4	6
i	F64	ヘルパー3級	パート	10年7ヶ月	1年7ヶ月		17		
j	F33	介護福祉士	パート	5年7ヶ月	7ヶ月	13			

注) 職員の記号は場面分析の図表と対応している

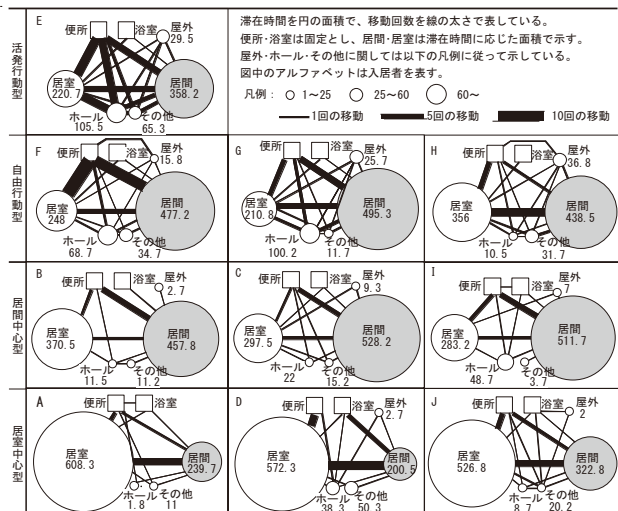


図 20 各室の滞在時間と移動回数

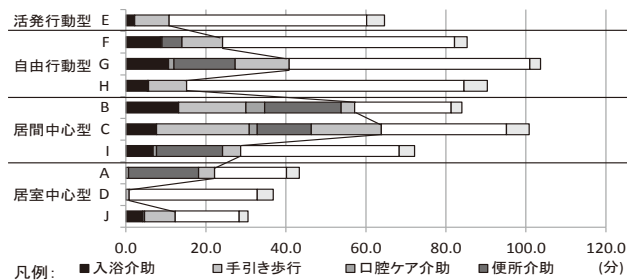


図 21 職員の介助内容と1日の平均所要時間

成の関係を明らかにするため、外出日(29日)を除く6日間の6:00~21:00の居間・居室・その他の場所(外出・入浴・排泄以外)の滞在時間と全移動回数^{注10)}平均値の4指標を用いたクラスター分析(ward法)により、活発行動型(入居者E)・自由行動型(FGH)・居間中心型(BCI)・居室中心型(ADJ)に4分類した。1日の滞在場所と時間の平均値を図19に、入居者の各室の滞在時間と移動回数を図20に示す。

活発行動型(E)は起床が早く6:00頃から居室外で行動を始める。朝食後は居間を出てホールや廊下を歩行することが多く、居室・居間共に滞在時間が少なく、その他の場所での行為が多い。排泄回数・移動回数が多く、居間・居室に限らず様々な場所に滞在している。また、移動に時間を要するためホール滞留時は立座が多い点の特徴で、ホールや居間では移動の途中で他の利用者との交流も見られた。また散歩を好むため外出の際は声を掛けてもらうことが多い。自由行動型(FGH)は居間を中心にホールや畑等各入居者の好む場所での行為が多く、移動回数が比較的多く行動範囲も広い。職員の作業の手伝いを行う場面が多く見られ、Fは食事前の台拭きは習慣となっており、自分から進んで行う場合もある。朝食後は畳スペースで職員が持ってきた洗濯物をたたみ、午後には畑の手入れを行う。排泄の回数が多く、ホールの滞在時間も比較的長い。GHは居室と居間の移動回数が多く、ホールや屋外の滞在時間も長い。また、居間・ホールを中心に他の利用者との交流が多く見られた。

居間中心型(BCI)は食事を含め1日の多くを居間で過ごす。BCは自力で移動できないため、居間での滞在時間が最も長く移動回数は少ない。Bは午後職員に促され午睡をとることが多いため、居室の滞在時間がやや長い。Iは居間で会話を楽しむ事が多く、時にはホールのテーブルで会話する姿も見られる。介助の必要はないがシル

バーカーを利用するため移動回数は少ない。

居室中心型(ADJ)は食事以外の時間は居室で過ごす事が多く、他の入居者との関わりはあまり見られない。移動範囲は居室・居間・トイレ・浴室が大半で、食事やお茶等で居室と居間の移動回数が多点が特徴である。Dはホールに滞留する場合もあるが、AJは他の場所での行為が見られない日もある。

6.4 職員の介助と所要時間

次に入居者の生活パターンと職員の介助行為・所要時間の関係を検討するため、職員の属性と勤務形態を表6、入居者毎の介助内容と1日の平均介助所要時間を図21に整理した^{注11)}。職員は10名で女性が8名と多く、年齢は20~60才代と幅広く、経験年数も5年以下から20年以上まで様々である。7名がヘルパー2級や介護福祉士、1名が看護師の資格を有している。勤務形態は早番(7:00-16:00)・日勤(9:00-18:00)・遅番(10:00-19:00)・夜勤(17:30-9:30)に分かれ、1日の業務は早番2名、日勤2名、遅番1名、夜勤1名の計6名で遂行する。夜勤は看護師、パート職員及び経験年数の少ない職員を除く6名で分担し、月に5~6日担当するが、夜勤明けの翌日は休みである。

活発行動型は自由に移動可能なため、付添いや見守りが中心でトイレ介助は行われない。自由行動型も付添いや見守りが中心であるが、トイレ・入浴介助は行われる。屋外での滞在時間が長いため、職員による見守りの時間が長い。居間中心型は手引き歩行等身体的な介助を中心に行われ、介助時間は最も長い。BCは歩行をはじめ生活全般に職員の介助を必要とするため、職員の目が届く居間での滞留時間が長い。Iはトイレ・入浴介助が中心である。居室中心型は居室の滞在時間が長いため、介助は居室の様子を見に行く等の見守りが中心であるが、Aはトイレ介助も行われる。他の利用者はトイレに行く時間を記録し声かけを行うが、DJはトイレも自立しているため声かけを行う必要がなく、職員による介助はほとんど行われない。

以上より、介護度が高い入居者は歩行介助を必要とするため、職

表7 空間構成と使われ方の特徴

		空間の特徴	使われ方の特徴	
DS	玄関	送迎	・アプローチに手すりを設置 *椅子を設置	
	浴室	入浴	・新規浴室 *浴室が近い	
	居間	昼食	・キッチンが狭い *自由時間と同じ部屋	
	訓練室	午睡	・ベッドを別室に配置 *ソファの設置	
	居間	自由時間	・ベッドを別室に配置 *空間が狭く、椅子座のみ	
	訓練室	機能訓練	・広い空間 *ベッドが同空間に配置	
	事務室	事務	・居間空間に位置	
	全体	介助	・居間と機能訓練室の2室確保 *面積が全体的に狭い	
	GH	居室	起床	・居室内に洗面台設置 *居室と居間が近い
		居間	食事	・居間と台所が連続 *居室内に洗面台設置
居間・ホール		自由時間	・居間空間が広い *ソファが1つ配置 *ホールに机、椅子を配置	
居室		就寝	・便所が居室の両端に設置 *居間とホールの空間が連続	
事務室		事務	・事務室を独立して配置 *居間に事務スペースを確保	
全体		介助	・空間が視覚的に連続 *空間が広い	
		・移動が楽 *座って履き替え可能		
		・介護度の高い利用者介助 *利用者だけでも移動可能		
		・職員2人しか入れない *準備中待ち時間が生じる		
		・午睡を取らない利用者にも対応可能 *床座、ソファ、ベッドの選択が可能		
		・好みや体調に応じて選択可能 *席が固定		
		・椅子を移動させて行う *静かに休めない		
		・居間空間を圧迫している *広さはないため、午睡時に居間で事務		
		・食事から午睡への準備始末行為が容易 *室内を相互に見通すことができない		
		・歩行介助の際他の利用者への配慮が必要		
		・居室内で身支度が容易 *居室から居間までの移動が容易		
		・利用者による手伝いが容易 *歯磨きも各自で可能		
		・食事空間としては十分な広さを確保 *2人がけのため、決まった利用者のみ使用 *好みに応じて居場所の選択可能		
		・部屋の位置によって近い方の選択可能 *職員が目につきやすい		
		・事務室から利用者の見守りができない *利用者を見守りながら事務が可能		
		・利用者の様子を把握しやすい *利用者の歩行介助等が容易		

注)・*は空間の特徴と使われ方の特徴に関連があるものを同じ記号で示している。

員の目が行き届く居間の滞在時間が長く、一方介護度が低い入居者は自由に行動できるため、好みの場所で過ごす利用者や居室で過ごす利用者が多い。職員の介助はいずれも見守りが中心で、トイレ介助の有無に相違が見られた。滞在場所等各入居者で行動パターンは異なるものの、視覚的に連続した空間のため、介護度の低い入居者を中心に、移動途中に居間やホール等での入居者同士や職員との会話や交流が行われている点が特徴として指摘される。

7. 空間機能の評価

施設の空間構成と使われ方の関係を表7に示す。デイサービス部門は旧小学校の管理部を改修し、デイサービス諸室が玄関周りに集中配置され、移動距離が短く来所時には利用者が一人で居間に移動できる。居間と機能訓練室が独立確保されているため、「午睡室分離型」の利点である食事から午睡への移行が容易で、午睡だけでなく自由時間の静養スペースとして利用できる点を再確認した。一方、管理部の施設全体を管理する防災・電気制御設備は更新されず、デイサービス部門の面積が狭くなり、利用者が座ると後部の通行が難しい点や、車椅子利用者は居室の奥まで入れず入口側の席で過ごす必要がある等課題もある。また、居間と機能訓練室は壁のみで仕切られ出入口も並列しているため、自由時間に利用者が機能訓練室で静養している際に室内が相互に見通せない点も課題といえる^{注12)}。トイレは面積が狭く、女性用は車椅子用と兼用で1箇所のみのため混雑する場合があります、改修設計時点で男女比を考慮する必要があります。

グループホームは旧小学校の教室・多目的ホール部分を改修し、居室は教室を2分割し設けることが可能で有効である。空間は全体的に広くゆとりがあり、居間を中心にホール、居室等1日を過ごす空間がまとめられ視覚的にも連続した空間であるため、視野が広く利用者は好みの場所を中心に自由に移動可能で、入居者同士や職員との交流も生まれやすい。ホールや廊下にソファや椅子を配置し、外には畑を準備することで入居者は好みの場を選択できる。職員は事務室から入居者の見守りが出来ないため、居間に事務スペースを設け見守りを行う。一方、居間は食事空間としては十分な広さがあるものの、くつろぎのための設えはソファ1脚のみで、食事と同じ

席で過ごす利用者が多い。居間に隣接した畳スペースは入居者の立ち座りに負担が伴うため、洗濯物の片付け以外には使用されず、畳スペースの活用方法やくつろぎ空間の確保が課題と言える。従って、畳スペースよりもソファセットを設えたりリビングコーナーとし、テレビ等を置く方法も有効と考えられる。以上のように平面構成と使われ方に矛盾が生じている点もあるため、廃校改修の場合には職員との事前打合せが可能な改修・運営計画の早期策定が重要である。

施設管理の側面からは、デイサービス部門に施設全体の事務室が設けられているが、グループホーム職員が24時間体制で管理するため、非常時に外部に連絡する際や、生活支援ハウス利用者の世話を行う場合に職員の移動距離が長くなる点は課題である。また、2階は1室が介護予防事業に使用されているが、他の諸室は調査時点では未利用の状態、今後の活用方法も確定しておらず、特別教室を含めた小学校を活用する場合の課題といえる。

8. 結論

本論では、過疎地域における廃校となった小学校建築を活用した複合型高齢者福祉施設を対象に、施設の需要特性と整備効果について検討し以下の知見を得た。

- 1) 地域住民の要望が高い高齢者福祉施設整備のため、自治体により1億4千万円の費用をかけて廃校の大規模改修が行われ、デイサービス部門・グループホーム・生活支援ハウスが設置された。社会福祉法人に運営を一括して委託する公設民営方式の採用により、高齢者福祉施設としての管理・運営体制が事前に整備されていた点が、地域の高齢者福祉拠点としての住民の利用と円滑な運営が開設当初より実現した条件として指摘される。
 - 2) デイサービスの月間延利用者数は200名前後で、施設の平均稼働率は約80%と安定している。利用圏は宇田・惣郷地区が中心で、広域基幹施設から移った利用者を含め、50-80%利用圏は共に1.0-1.6kmの範囲に収まり、1日の平均送迎時間も1.8時間と短い。介護予防も両地区から8名/定員10名が参加しており、近隣地域のデイサービス需要増加に対応している。また、グループホームも施設開設と同時に定員に達し、入居者は全員阿武町内居住者でかつ町全域からの需要に対応している。
 - 3) デイサービス部門は機能がコンパクトにまとめられ、居間と機能訓練室が独立しているため、食事から午睡へ移行が容易で、休養スペースが確保されている点は評価される。グループホームは旧教室と多目的スペース部分に、視覚的に連続した居室・ホール・居間・和室が配置され、入居者の様子が把握しやすく、入居者と職員の交流が促進される点は評価される。また年間を通して地元婦人会の認知症勉強会がホール隣接の談話室で開催され、地域交流の拠点として利用されている。
 - 4) 施設全体を管理する事務室がデイサービス部門に設けられているため、グループホーム職員が非常時に対応する場合や、生活支援ハウスと往復する際に移動距離が長い点や、2階は介護予防以外の用途が未定で有効利用されていない等の課題もある。
- 以上、少子高齢化が進行し小学校が廃校となり、福祉需要が増大する農山漁村地域は多数存在するが、小学校は児童の徒歩通学を前提とし集落中心部に立地する場合が多く、地域福祉需要に対応する利便性の高い施設として活用する意義は大きいと考えられる。本事

例は行政と地域住民が活用方法を協議し、地域福祉需要の高まりを背景に施設整備方針が定められ、デイサービス部門を始めグループホーム・生活支援ハウス等が設置され、社会福祉法人による運営により、地区を主対象とした高齢者の通所介護需要及び町全域の施設居住需要に対応しており、介護予防や地域交流拠点としても利用されていることから、公設民営型の複合型福祉施設としての整備効果は大きく、農山漁村地域において廃校活用を計画する場合の一つのモデルとして位置付けられよう。

施設の空間構成については、トイレ・プリンター・エレベーター等の設備更新や新設という財政的課題は有すものの、農山漁村地域の小学校は6クラス程度の小規模校が多く、教室を分割し居室とすることにより、既存の平面構成を維持したまま10名程度のグループホームに用途変更することも可能である。

本事例ではデイサービス部門で2室が確保され、グループホームでは居間を中心に視覚的に連続しているため、入居者の様子が把握しやすく、居室の狭さ等の課題はあるが総体的には廃校を有効活用し運営出来ていると評価される。さらに、婦人会主催のクリスマス会ではグループホーム入居者とデイサービス利用者が一緒に参加する交流も見られたことから、今後は空き教室を利用した昼食会やコンサート等の地域住民を含めた交流への展開も期待される。

ただし、本事例の場合旧音楽室・家庭科室等の特別教室は現時点では未利用の状態で、1学年1教室以上の規模を有す学校施設を再利用する場合には、地域住民の参加により子育て支援や放課後学童保育等を含めたより総合的な活用計画を策定し、福祉法人に加え地域組織・ボランティア等の協力を得た地域主導型の運営体制を構築し、施設の有効活用と地域活性化を促進することが課題といえる。

尚、本事例は扇形の教室部分をグループホームに充てた例で、視覚的に連続する利点を有すが、一般的な学校は片廊下型で廊下を介す必要があり、視覚的連続性の確保が困難な場合も予測されるため、今後は標準的な教室配置の事例調査を行う必要がある。

謝辞

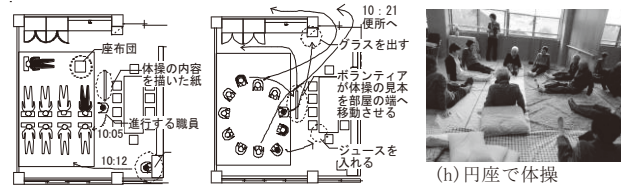
本研究を進める上で、藤山千佳子氏(阿武福祉会)、デイサービス施設長清水紀美子氏、グループホーム施設長三村美穂子氏及び各施設職員の方々の多大な協力をいただいた。調査には中川真衣氏(卒論生)の協力を得た。末尾ながら記して謝意を表します。尚、本研究は日本学術振興会科学研究費(22560613)の助成を受けたものである。

注

- 注1)文1)のp.5より引用した。
- 注2)2010年9月に始められたプロジェクトで、活用希望廃校を募集しHPに掲載し、企業とマッチングを行うものである。2011年までに、廃校を公民館・資料館・社会体育施設に活用された例は全体の57.2%と半数以上を占め、福祉・医療施設等に活用された例は12.3%と2番目に多い。他に体験交流施設や庁舎、法人施設、住宅、大学施設等へ転用された例もある。
- 注3)空間構成と使われ方の関係をもとに分類を行った。「1室完結型」は全てのプログラムを同一空間で行う型で場の転用に伴う職員の負担が増すこと等が指摘されている。「食事室分離型」は食事のみ居室を分ける型で食事・午睡の準備始末行為を円滑に行うことができる。「午睡室分離型」は午睡室を分ける型で食事から午睡への移行が容易で、午睡のみでなく自由時間の静養が可能である。平面図事例については文15)を参照されたい。
- 注4)面積の広いグループホームのホール部分や生活支援ハウスにもスプリンクラー設置が必要なため費用を要している。

注5)施設職員は町内出身者が多いため、利用者やその家族、地域住民との人間関係があり、施設への要望を職員が直接住民から聞く機会が多いとのことである。

注6)介護予防の使われ方の1例を付図1に示す。利用者はマット上に移動し仰向けでの体操が行われ、次いで円陣を組んで座り職員が円の中に入り新たな体操を行う。体操が終わると利用者は席につきお茶を飲み、かるた・パズル等全員でゲームを行う。



付図1 介護予防の使われ方

- 注7)職員の聞き取り調査により明らかになった。
- 注8)職員は1日3名で対応する。職員は4名で年齢は30代から50代と幅広く、1日の主要務が決められており、機能訓練は2名の職員で対応する。調理は週に数日1名のボランティアスタッフが補助し、男性職員は行わない。また、1日の利用者は8~9名と多く、介護度は要介護1以上の利用者が7割以上を占め、介護度3以上の利用者も2~4名来所している。
- 注9)入浴方法については職員へのヒアリングをもとにしている。
- 注10)行動回数は居室から居間に移動した場合を1回とし、往復の場合は2回とカウントしている。
- 注11)見守りについては個人を特定できる時間のみとし、事務スペース等から不特定多数を見守る時間は除外している。
- 注12)デイサービス施設長へのヒアリングによれば、施設改修には関わっておらず、居間と機能訓練室の間に窓がなく居間から利用者の様子が見ることができず困っているという回答を得た。

参考文献

- 1) 廃校施設等活用状況実態調査の結果について：文部科学省, 2012. 9
- 2) 藤野哲生他2名：公立小学校廃校の要因とその課題に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No. 649, pp. 579-585, 2010. 3
- 3) 斎藤直子：公立小中学校の統廃合プロセスと廃校舎利活用に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No. 627, pp. 1001-1006, 2008. 5
- 4) 野沢英希他3名：廃校のある地域属性の特徴と再利用に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1 分冊, pp. 865-872, 2012. 4
- 5) 吉村彰他2名：廃校施設の有効活用に関する調査研究その1-3, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1 分冊, pp. 101-106, 2005. 9
- 6) 青柳友紀他3名：青森県八戸市における廃校の体験交流施設への活用が地域に及ぼす影響に関する研究, 日本建築学会関東支部研究報告集, NO. 81, pp. 311-314, 2011. 3
- 7) 秦秀宗他3名：山村地域における廃校活用と都市農村交流, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-2 分冊, pp. 493-494, 2000. 7
- 8) 佐藤嵩他2名：公立小学校の廃校活用に関する事例調査, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1 分冊, pp. 175-176, 2010. 9
- 9) 河野学他3名：建築基準法が廃校後の公立小学校の用途変更に及ぼす影響について, 日本建築学会計画系論文集, No. 609, pp. 47-52, 2006. 11
- 10) 鈴木健二：廃校の転用に際して建築関連法規が及ぼす影響, 日本建築学会技術報告集, 第17巻 第36号, pp. 633-638, 2011. 6
- 11) 吉元佑太・鈴木健二：廃校から高齢者施設への転用に建築基準法が及ぼす影響, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1 分冊, pp. 583-584, 2009. 8
- 12) 姜燕・龍有二・大矢一成：廃校校舎をコンバージョンした高齢者福祉施設のアンケート及び温熱環境調査その1-2, 日本建築学会九州支部研究報告集, NO. 64, pp. 325-332, 2013. 3
- 13) 山本幸子・中園真人・清水聡士：廃校となった公立小中学校施設の運用状況, 日本建築学会技術報告集, 第18巻 第38号, pp. 351-354, 2012. 02
- 14) 中園真人・三島幸子・山本幸子：広域基幹施設と民家を活用した小規模デイサービス施設の整備プロセスと利用特性, 日本建築学会計画系論文集, 第77巻 第675号, pp. 1169-1177, 2012. 05
- 15) 中園真人・三島幸子・山本幸子：木造民家を再利用した高齢者デイサービス施設の空間構成と使われ方, 日本建築学会計画系論文集, 第79巻 第696号, pp. 491-499, 2014. 02

UTILIZATION OF ELDERLY WELFAIR FACILITY CONVERTED
FROM CLOSED PRIMARY SCHOOL IN RURAL AREA

– Case Study on 'HIDAMARI-NO-SATO' in Abu Town Yamaguchi Prefecture –

*Sachiko MISHIMA**, *Mahito NAKAZONO*** , *Sachiko YAMAMOTO**** and *Syohken KOH*****

* Doctoral Course, Grad. Sch. of Science and Eng., Yamaguchi Univ.

** Prof., Grad. Sch. of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

*** Assistant Prof., Fac. of Eng., Info. and Systems, Univ. of Tsukuba, Dr. Eng.

**** Lect., Grad. Sch. of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng.

By grasping the use characteristics and management form of elderly welfare complex facility converted a closed primary school, and by analyzing its space composition and usage, this paper aims at clarifying whether the complex facility fills the demand of the elderly-people welfare in the area and evaluating space function of it.

The number of monthly users of day-care service section is around 200 persons and the average operating ratio is stable with about 80%, so this complex facility fulfills the increasing demand of elderly welfare in the region. Moreover, three or more requiring care level users increased in number, because the use area of the new complex facility was expanded and it became possible to accept wheelchair users. The capacity of the group home filled simultaneous with facility establishment, its residents were all the members of Abu town, and 50 persons are waiting for a vacant room in it. But the group home for dementia elderly had given a feeling of insecurity to neighboring residents at the beginning. In order to obtain residents' understanding, the dementia study meetings by a local ladies' society were held through every year in the lounge of facility, and now it is used also as a base of local interchange.

About the evaluation of space utilization, day-care service rooms were converted from the management department of primary school and arranged intensively near the main entrance hole. Therefore the migration length is short and the user is able to move to living room alone at the time of arrival. It is easy for elderly people to take a nap after lunch because the living room and the functional recovery room are divided, and they can use the functional recovery room also as a rest space of free time at leisure. The group home was converted from the classrooms and multipurpose hall section of the school, and the space is wide on the whole. The spaces used well by elderly people, such as their own room and living room, are arranged compactly and continuing visually. Therefore, elderly people are able to have a choice of stay space, and to build a good relationship with other elderly and staffs. Moreover, the scene where the residents of the group home and the users of the day care facility participated together was also observed at the Christmas party which the ladies' society sponsored, and it is expected that these activities between neighboring residents and users of welfare complex facility using an empty classroom will develop from now on.

However, in this example, special classrooms such as music room and home economics room, were in the unused state. In reusing a school with the scale of one or more classrooms of one grade, it is important to plan the various usage include an aid for childcare, care of schoolchildren after school hours etc. with regional resident's participation. It is a subject to construct the local initiative type management organization that obtained the cooperation of community organizations, volunteers etc. in addition to the social welfare corporation, and to promote effective use of facilities and regional vitalization .

(2014年6月9日原稿受理, 2014年12月22日採用決定)